

令和2年度第1回
東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会
資料評価部会（工芸品・生活民俗部会）

令和2年11月4日（水）
東京都江戸東京博物館 2階会議室

午後 3 時 27 分開会

大森文化施設担当課長：それでは定刻前ではありますが、委員の方々、皆様おそろいですので、ただいまより会を始めさせていただきますと思います。

本日はお忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和 2 年度第 1 回「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会資料評価部会（工芸品・生活民俗部会）」を開催させていただきます。

私は東京都生活文化局文化振興部文化施設担当課長の大森と申します。本日、司会を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

今回の資料収蔵委員会には収集部会と評価部会がございます。収集部会は江戸東京博物館の収蔵品としてふさわしいか否かを御審議いただく会となっております、また評価部会は江戸東京博物館の収蔵品としての価格を個別に委員の方々に御評価いただく会となっております。

なお、本日午前中に収集部会を開催いたしまして、当部会でお諮りする案件につきましては収蔵するのが適当であるという旨の御意見をいただいておりますので御報告させていただきます。

本日の評価部会は都民の財産となる貴重な資料にふさわしい適正な価格評価をよろしくお願いしたいと思います。

まず初めに、東京都江戸東京博物館副館長の小林から御挨拶を申し上げます。

小林副館長：江戸東京博物館副館長の小林です。今日はお忙しい中お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

江戸東京博物館資料収蔵委員会の評価部会ということで、今年度第 1 回の資料収蔵委員会となります。本評価部会では 2 点の生活・民俗資料を御評価いただくことになっております。どれも常設展示や展覧会での活用が可能であり、江戸東京博物館に必要不可欠な資料でございます。

御審議のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。

それでは、本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。

私の左の席のほうから時計回りに順に御紹介させていただきます。

植野委員でございます。

内田委員でございます。

高波委員でございます。

小川委員でございます。

小沢委員でございます。

本日はよろしくお願いいたします。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都江戸東京博物館事業企画課長の飯塚でございます。

よろしく願いいたします。

それでは、これから議事に入りたいと思いますが、それに先立ちまして、当部会の公開について申し上げます。

当部会は、「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱」第12の規定により、原則公開となっております。そのため、委員の皆様のお名前と現職名は東京都のホームページ上にて公開しております。

一方で、当部会における評価対象資料の価格評価に関する議事は、同要綱第12の第1項(1)の規定により非公開となっております。

当部会の議事録は同要綱第12の第2項規定により資料収集決定後に公開を予定しています。公開に当たりましては事前に御確認させていただきと考えておりますので、同要綱第12の第2項(1)により、委員個別の価格評価については非公開というふうになっております。

それでは、議事に入りたいと思います。

まず、飯塚課長から本日御評価いただく資料の説明をお願いいたします。

飯塚事業企画課長：説明の前にお手元の資料の確認をお願いいたします。

まず、一番上に会議次第がございます。

次に、A4の委員名簿が1枚ございます。

続いて、A4の、資料収蔵委員会要綱が2枚ございます。

次に、A4の、令和2年度第1回資料収蔵委員会資料評価部会（工芸品・生活民俗部会）説明資料が1枚ございます。

続いて、A3の、令和2年度第1回資料収蔵委員会資料（資料評価部会 工芸品・生活民俗部会）が2枚ございます。

最後に、A3で、令和2年度第1回資料収蔵委員会資料評価部会（工芸品・生活民俗部会）評価票が1枚ございます。

なお、お配りした名簿の肩書等に誤りがございましたら、恐れ入りますが、後ほど事務局へ御連絡いただければと存じます。また、お手元に郵送しました資料につきましては、現時点では未公開の情報が含まれておりますので、会議終了後、回収させていただきたく存じます。

それでは、今回御評価いただく資料について説明いたします。

A4の、令和2年度第1回資料収蔵委員会資料評価部会（工芸品・生活民俗部会）説明資料を御覧ください。

まず、「1. 刺子長半纏 龍虎図」歌川芳貞画、江戸末期のものと推定されます。

刺子とは木綿の布を何枚か重ねて刺しつつ、布地を補強し保温性を高めた仕事着です。伊達を競い、町火消に憧れた江戸っ子たちの間で刺子半纏の裏地に勇壮な武者や霊獣などの絵柄を描くことが、江戸の後期から明治初期頃まで流行しました。

この刺子半纏は、表地は藍色一色で、裏地に龍虎の勇壮な絵柄と「芳貞」の銘が記されています。芳貞は武者絵を得意とした歌川国芳の弟子で、馬喰町三丁目の駿河屋という旅籠屋の主人でした。

保存状態もよく展示映えする貴重な資料です。常設展「町の暮らし」コーナーや火消関係の展覧会で展示できると見込んでおります。

続きまして、「2. 山王祭礼静人形山車模型」松雲斎徳山作、嘉永元年のものです。

伊勢町、小田原町、瀬戸物町からの注文を受けて、松雲斎徳山が嘉永元年に製作した山王祭礼静人形山車の7分の1スケールのミニチュア模型です。最上部に静御前の人形を据えた山車本体と牛牽き、鳶人足などの人形計5体、牽き牛2頭からなります。一部欠損部品が見られるものの、保存状態は良好です。ミニチュア模型ながら、江戸城の城門をくぐる際に用いられた山車本体の昇降機構など、細部に至るまで精巧に作られています。また、山車模型の側面を飾った幕類の意匠、緑地に飛鶴文様の上幕、赤地に若草文様の見送幕、水引幕の三つ巴紋などは、歌川芳藤が「東都日枝大祭礼練込之図」（慶応4年、当館蔵）で描いた静人形山車の図柄と一致します。作者の松雲斎徳山は、雛市で知られる日本橋十軒店居住の人形師です。明治維新後、盛大を極めた天下祭は、明治政府によって規制され、江戸型山車の多くが関東周辺の都市に売却されていきましたが、そのうち栃木市倭町三丁目と青梅市仲町に現存している静人形山車が徳山の作として知られています。

本模型は江戸時代に製作された江戸型山車模型のうち、現存が確認される唯一の事例であるばかりでなく、同時に製作された山車本体も栃木市に現存していることなどから、江戸の祭礼文化を知る上で極めて貴重な資料と言えます。

この資料は常設展「町の暮らし」、「江戸の四季」、「江戸の盛り場」の各コーナー、祭礼関係の特別展などで使用できます。

説明は以上でございます。

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明で何か御質問、御意見ございますでしょうか。どうぞ。

小沢委員：2番の模型なのですが、実物も模型も徳山という方が作ったものなんですか。

飯塚事業企画課長：そうです。

小沢委員：ありがとうございます。

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。

ほかに何かございますでしょうか。

それでは、次に評価方法について御説明いたします。

まず、評価票に金額を記載いたしまして署名していただくことになります。

評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの価格の平均値を委員会としての評価額とさせていただきます。

こちらについて何か御質問、御意見ございますでしょうか。

特にございませんでしたら、早速なんですけれども、資料の実見をしていただきたいと思います。

思いますので、お手数ですけれども御移動をお願いいたします。また、資料に関する個別の御質問につきましては、会場にて学芸員にお尋ねいただければと思います。よろしくお願いいたします。

(委員離席)

(資料実見)

(委員着席)

大森文化施設担当課長：それでは、議事を再開させていただきます。

資料を御覧になっていただいて何か御意見、御質問ございますでしょうか。

よろしいですか。

それでは、質問等ございませんようでしたら、お手元の評価票に価格評価と御署名をお願いいたします。

なお、金額は消費税込みになっておりますので、よろしくお願いいたします。ペンで御記入いただけると助かります。

(評価票記入)

大森文化施設担当課長：御記入がお済みになった方は係の者が確認いたしますのでお声かけください。確認が終わりましたら御退席いただいて問題ございません。

それでは、御評価のほう、ありがとうございます。

本日はこれで終了になりますのでありがとうございました。

午後4時14分閉会

以上